

2006 アジアフォーラム in 石川

講師：山本一力 氏 （作家）

演題：「真に豊かな社会とは」

日時：2006年8月26日

私は日本で江戸時代の小説を書いています。「時代小説」というのが、日本語で表現される私の書いている小説の分野を示す言葉です。小説を書くに当たって、さまざまなことを調べます。江戸時代、徳川幕府が始まったのは、今からおよそ400年以上昔になります。1603年に、徳川が江戸に幕府を開きましたので、それからすでに403年が過ぎました。そんな時代のことを見てきた人は、誰もいません。小説のジャンルの中でSF小説というものがあります。ほとんどのSF小説は今よりも先の時代、近未来を描く小説です。でも私は、時代小説というのも、言いかえればSFであると思っております。誰も見たことがない時代。違うのは、すでに歴史が刻まれたことが記録に残っているか、まだ誰もページを開いたことのない今日から先へ向かっての日々を書くかで、その違いはあります。でも前に行くも、後ろを振り返るのも、することは同じです。なぜなら、人が生きていくということは、自分の二本の足で地べたを踏ん張って、その上に立って物事を進めていくということで、前に行くのも後ろに下がるのも同じことです。

私が生まれたのは、1948年です。もう今から58年も昔になります。私が生まれた時代、不幸だった戦争が終わってまだわずか3年しか経っていない、そんな時代に誕生しました。物事が見えるようになって、自分の頭の中に子供の頃の記憶が残っているというのは、誰しも大体早くても5～6歳、その辺のころのことでしょう。今子供の頃の自分を振り返ると、物が本当に何もなかった時代でした。でも、夢がいっぱいありました。世の中は今から比べれば物がなくて、貧しいという言い方が合うかもしれない。でも、今の人以上に、あの頃が幸せに思えることがあります。今、私は58歳です。この年になって、時々、強くそのことを頭で思うことがあります。

例えていえば、私はたった二日前にサンフランシスコから二十日間くらいの旅をして、戻ってきました。わずか二日前です。サンフランシスコを発って成田の空港まで十時間もあれば飛行機は飛んできます。大変に天気に恵まれて、まったく揺れもしないで気持ちよく乗ってきたのが日本航空だったということもありますが、大変気持ちのいい旅でした。10時間あれば、太平洋を隔てたあの西海岸のサンフランシスコと成田とが結ばれるようなそんな便利な時代です。

私が生まれた1948年にそんなことを考えた人はきっと誰もいなかった。小学校に入ったのが生まれてから6年後ということは1954年。そのころはまだ物はほとんどありませんでした。日本では二十歳になり「成人」となると、大きなステップを越えることになる。私が

成人を迎えたのは 1948 生まれですから 1968 年です。

結局、人というのは、自分が生きてきた時代を時間の軸で切ったときに、経験できたことと、知識で追体験のできた二つのことが、自分の体の中に取り込まれています。経験してきたことは「あ、あれなんだな」ということを、振り返って思い返す。でも知らなかった時代のことは、どうでしょう。例えば私が生まれたのは 1948 年、小学校に入ったのは 1954 年、成人を迎えたのは 1968 年。その四年前 1964 年は、日本が大きな転換期を迎えた年です。一つは東京でオリンピックが開かれました。私はそのときまだ高校生でした。あの時代は、東京オリンピックが開かれるんだという大きな目標に向かって進んでいました。ちょうどそのときに、東京にいました。オリンピックが開かれるすぐ近くにいました。今、代々木のオリンピックで使った水泳の競技場、室内の競技場、またオリンピックの選手村となった跡地は、公園となって残っています。ここに、昔、選手村があったんだよということを、情報としてみんながシェアしています。

私はそのオリンピック村の中を新聞を配って朝に晩にその中を駆けていました。ですから一つの経験を皆さんとは違う形で、言ってみればオリンピックをリアルタイムで経験して育ってきたそういう世代です。

あのころ 1964 年にオリンピックを開くんだ、ということで日本はみんなが一生懸命になって前に進んでいきました。いろんな技術がそのオリンピックを成功させるために結集されたことがあります。例えば新幹線が九州の福岡まで伸びています。その基になったのはオリンピックの年に開業した東海道新幹線です。それまで 6 時間くらいかかっていた東京と大阪を、その半分の 3 時間 10 分で結ぶということを科学の力で実現をさせました。二つの都市が結ばれる時間が半分になると、人の生態が根本から変わります。それまでは大阪に旅をするといったら、必ず一泊していました。仕事であれ、レジャーであれ、泊まってくるのがごくあたりまえの暮らし方でした。ところで新幹線が 3 時間で東京と大阪を結ぶことになったら、朝早い新幹線で例えば 6 時に出る新幹線で東京を出て行けば 9 時過ぎには大阪につくことが出来ます。それから 6 時間仕事をして夕方の 5 時に新幹線に乗ってもまだその日のうちに東京に帰ってくることが出来ます。

人の仕事の仕方も暮らしの仕方も根本から変わってしまいました。1948 年生まれの私はそういう風に物事が根っこから変わっていくということをいろんなことで経験しました。思い返してみれば、幸せな時代を過ごして来たといえるかも知れません。私が生まれたときにはカラーテレビはもちろんのこと、普通のテレビも白黒のテレビも、私が生まれた高知の町ではまだ放送が受信できませんでした。テレビを見ることが出来たのは、小学校の 4 年生か 5 年生のときです。それまでまったく考えたこともなかったようなテレビというものがある日突然映るようになった。つまりゼロだったものが一になったんです。この経験はものすごくショックでした。ジェット機というのが飛ぶようになったのも私は大人になってからそれを見たんです。私は 18 歳で高校を卒業して、その後、旅行会社に就職しました。旅行会社に入ったときにはまだまだ世の中に飛行機というものの存在はプロペラが主

流だったかもしれません。特に日本のように国が小さいところは一地点から一地点まで飛ばすこの飛行機技術が上がったとしても飛行場の施設が追いついていませんでしたから、身近な離発着の出来るプロペラの方が主流だったんです。それが18歳で卒業して旅行会社に入ると、そこから何年もしないうちにどんどんジェット機が主流になってきました。でも今ではカラーテレビはあたりまえで、飛行機といえばジェット機があたりまえ、そういう時代を生きていられる。

それ以前の、私が今お話をしているようなことは、歴史の中に刻み込まれていた一コマではあったとしても、そのことを自分で経験して「あ、そうだったよね」といってそれを体験した感覚を共有することはもはや出来ないでしょう。今テレビの放送がされていない国を探す方が難しいかもしれない。いろんなことが手近なところで簡単に手に入るようになった今の時代。それをもし便利であるという言葉ではなしに、豊かであるという表現でその現象を捉えようとしたら、私は、自分の心の中に少なからず違和感を覚えます。

先ほど申し上げた、豊かであるということと今の時代ということの両方を重ね合わせたときに、それが合ってるのかどうか、自分で問いかけた答えを自分で書くことに、ためらいを覚えます。物がなければ暮らしというのはいろんなところで不便を感じるでしょう。でもその代わりにこれがあつたらいいな、こんな風なものが欲しいなという夢を描くことが出来ます。私が子供の自分、周りにいた仲間は頭の中でいろんなことを想像して、夢を描きました。「こんなふうなことがあるといいね」「夏になったら氷がいっぱい食べられる、氷を削る機械が自分の家にあつたらいいな」。周りの暮らしのレベルから考えると、子供が想像したことはその程度です。今のように、エアコンディションが効いてる部屋で、夏でも冬でも例えば半袖シャツ一枚で過ごすなどということは、想像も出来なかった時代。子供達が描く夢というのは少し手を伸ばせば届くかもしれないということを夢に描いていました。そういうのを全部、今はもう実現しています。

先ほど申し上げた太平洋を隔てて反対側の西海岸にいた二十日間、日本で起きていることを本当にリアルタイムにコンピューターのモニターを通して読むことが出来ました。インターネットの新聞のページを開けば、日本にいるのとまったく同じ時に、今何が起きているかを読むことが出来ました。それが、ごくあたりまえでした。しかし、今から10年前、たかだか10年前、1996年にどうだったか。いろんなことを私は覚えています。その時、私は仕事でアメリカに何度か出張で行きました。その時には、パーソナルコンピューターを自分で持ってアメリカに行くということは、考えてもいませんでした。インターネットで日本の新聞が読めるということは、まだ手近なところにはありませんでした。では、何をしていたか。日本の新聞が現地のLAで衛星通信を通じ、アメリカで印刷され、それをお金を出して買っていました。どれだけ早く印刷されたとしても、そこには時間差があります。新聞が編集されて印刷される間には、情報がすでに動いています。ですから、新聞を開いて読んだ時には、そのニュースはすでに古いニュースだったかもしれない。でも私はその新聞を開いて読むときに、古いの新しいのなどは一切考えませんでした。日本の新

聞を今読めているということ、喜んで読んでいました。たかだか10年の間に、喜びの質がこれだけ変わっています。読めることが嬉しかったのが、今は、自分の手でパーソナルコンピューターのモニターを通して、今この瞬間のニュースを読まないことには、もはやそれはニュースではない、と思うように知らないうちに自分が変わってきています。

生きていく上において、さまざまなことが変わってきています。一番わかりやすい言葉でいえば、人は我慢をするという、「自分の中にある時間を待つ」というその心構えがどんどん減ってきていると思います。待つということが出来なくなっている。一時間待てばそれが仕上がるということでも、その一時間を待てなくなってきた。昔は、一日という単位の中で考えればよかったことが、科学の進歩の中で、時間の軸がどんどん短くなっている。気が付けば、その時間の軸が一時間というところまでできていた。たかだか、今から何年か前のことです。でも今はもう一時間では遅い。分なのか、秒なのか。こうだ、といったらすぐ打ち返しがこないことには、我慢が出来なくなってきた。日本にいる時、これは日本人がせっかちなせいかなと、実は思っていたんです。街を歩いていると、いろんなところで携帯を手にした人が、歩きながら電話をしているし、また電子メールを送らんがために携帯電話をピコピコ押している。もうその姿を見るのがごくあたりまえの光景となっています。ひょっとして日本人は、いろんなことでショートテンパーになったのかなと思っていました。でも、今回アメリカへ一年ぶりに行ってみると、同じサンフランシスコで去年は見かけなかった光景である携帯電話を架けている人、電話のボタンを操作している人が街に溢れていました。「何だこれは」。

サンフランシスコは、街全体が坂の上にたっているようなものです。平らな地べたを歩くということは、ほとんどありません。上りか下りかです。東京の街を歩く時には、坂道ではないところも多くありますから、歩きながら携帯電話をピコピコとやることは、それほど苦痛なことではない。でもまさか坂の街のサンフランシスコで、人が同じようなことをやっているとは思ってもみなかった。日本よりはまだそういうことをしている人の数は少ないかもしれませんが、でも少なくとも、去年に比べたらけた違いの数が増えていました。本当に考え込んでしまいました。人は一度与えられた便利な道具を手放すことは、絶対にできません。与えられた道具が便利であればあるほど、それを先へ先へと必死になって改良していこうとします。その努力を一所懸命にします。でも根っこにそういう芽がないときにはどうということになるか。

先ほど、話の始めに私は時代小説を書いていると申しあげました。私の時代小説の舞台として描く時代は、日本でいう江戸時代です。徳川家康が今の東京、江戸と言われた場所に政府を樹立したのは1603年です。それから260年以上の間、徳川は江戸で幕府をし続けてきました。世界中をみても一つの政権がこれだけの長い間、政治を自分達の支配下に置いていたというのは稀有な例です。日本はそのとき、鎖国という政策をとって、海外から日本に入る情報を長崎の一箇所だけ窓を開けて、これは建前的にということになりますが、そこを開けて後は塞ぎました。ですから200何十年の間、日本は日本の中だけで物事を自

己完結させて文化を育んできました。江戸時代を描きながら私は強く思うことが一つあります。江戸が幕府が開かれた 1603 年に歩いていた人物と幕末の 1860 年くらいに街を歩いていた人間が、通りでドンと出くわして「こんにちは」と挨拶したときにどういう現象が起きるのか。この二人はまったく違和感無しに同じ話が出来ます。なぜなら、その間、文明は進化していましたが、根本的な物事というのは何も変わっていないからです。

1603 年に無かった電気が、1860 年にあったかどうか。日本ではありませんでした。では、自動車はどうか。車のエンジンというのは、発明されていませんでした。1860 年に走っていた船は、風の力で押されていく帆船か、人間が手で櫂を漕ぐか、どちらかです。いずれにしても人の力か風の力で走るということではなかった。幕末もまったく同じです。その手前に、アメリカから黒船と呼ばれるものが日本に来て停泊して、日本中が大騒ぎになりました。黒船は蒸気機関のエンジンを積んでいました。でも日本にはそんなものは無かった。つまり 200 何十年もの間、日本の人たちは同じことを共有できていたんです。今の時代の人たちはどうか。

例えば、今のあなた方と今から 20 年前にこの世を去った人とが、たまたまその人が生まれ変わってきてその場において 20 年前の知識のまま今日この場所に立っていて、通りでドンと出くわしたとしましょう。どういう会話になるか。いろんな話をしていくうちに、別れ際に「じゃ、またご連絡を取らせていただきますから、あなたの携帯電話番号を教えてください、メールのアドレスを教えてください」と、今ではきわめてあたりまえのこの会話を 20 年前の人にしたらどうなるか。まったく理解できないでしょう。「何のことですかそれは」、つまりたかだか 20 年の間に、世の中まったく変わってしまいました。それだけ時代が便利にはなっていますが、ものすごい速度で人の背中を押しつづけているのかもしれない。知らないうちに人は自分で気づかないうちに、己の体を前に前に進めようとしている。

これは何もあなた方のことを言っているわけではない。私自身がそうです。私は時代小説をパーソナルコンピューターで書いています。つまり電気も何も無かった不便な時代を今の時代の文明の機器を使ってひたすら書いています。しかも日本の中に時代小説の作家さんは数多くいらっしゃる。でも、今の時代の例えば電子メールをこれだけ自分の身近に置いて駆使している作家さんは、そんなにいないかもしれない。サンフランシスコでも私は原稿を書いて、東京の出版社に送っていました。Eメールがあるからこそ、締め切りを短く出来たんです。もし昔のように、ファックスしかない時代に私が小説を書いていたら、今のようなこんなタイトな時間の中で、原稿は書けなかったでしょう。「我慢がきかなくなっている、体が前に前に押されている」と、話をしている当の本人が、一番そういう恩恵を自分の中に取り込んで生きています。その暮らしを見ながらふと思うことは、気をつけていないと、自分が生きていく生き方を根本から勘違いをしてしまう恐れが大いにあるんだということです。これを私は今、自分に強く言い聞かせています。

日本には昔から人の情け、人情という言葉が、今でも大事に使われています。でも人情というものが時代の流れの中で少しずつ形を変え、あり方を変えてきているように思えてな

りません。そのことについて触れるのに、私が描いている江戸時代まで遡る必要はありません。高知から私が東京に出てきたのは1962年です。中学の3年生で東京へ出てきました。1962年から高校を卒業するまでの1966年までの4年間、私は新聞を配達しながら学校に通いました。その新聞配達をする中で、いろんな人に出会うことができました。新聞の朝刊は、朝の4時に新聞社から新聞の専売店に届きます。夏は明るくなっていますが、もう8月の今の時分になると4時はまだ夜が明けていません。冬になると真っ暗です。晴れていると空に星が輝いています。そんな中、新聞を配りに行って2時間くらい新聞を配り終えてから学校に行きました。晴れていれば新聞配達は別段、苦しいことはありません。でも、季節が夏を過ぎて秋も遠くになって冬が来たら、朝の4時は手が凍えそうに寒いのです。そんな寒い中、もし雨が降ったらどれだけ体を温めようとしても雨に打たれている自分の指先は凍えて千切れそうに痛いのです。そんな中、新聞を配っているときに配達してる先で朝早く起きて、その家のお母さんが、熱いお茶をいっぱい飲ましてくれたり、甘くておいしいココアを飲んでいきなさいと飲んで飲ましてくれたこともありました。そのときにこの指が感じたぬくもり、これは人情です。人が示してくれるぬくもりというのは形になって伝わってきます。そのぬくもりを体の中に取り込んだことで、私は雨の中でも挫けずに新聞を配ることができました。

今の時代、世の中が大きな変化を遂げて、新聞が配られなくてもコンピューターの画面で新聞のヘッドラインが読める時代です。便利さを追い求めていくと、つい、人と人が触れ合うことを忘れて、答えだけを欲しがるようになります。でも生きていくということは、自分が地べたを踏ん張って歩いて、自分の体で感じたことを体の中に取り込んでいくことでわかることです。人が、自分の体の仲に取り込む感じ、それは日本ではなくても、国が違おうが、人種が違おうが、人という生き物が感じていくものはきっと同じだと思います。親になって、自分が子供を授かって、私の歳になれば、もう子供も大きく成長して、新たに結婚をして、家庭を築いているのがごく普通です。20代で結婚をしてすぐに子供を授かったとすれば、親が40代の時に、子供は日本でいうところの「成人」を迎えます。

今回アメリカを旅したときにある鉄板焼きのレストランでのことです。私の方は家族4人でその店に入っていました。アメリカの黒人の3人連れの人たちが同じテーブルに座ることになりました。その人たちの家族の構成は男性が二人と女性が一人。私の長男はその3人連れを見て、お父さんと、お父さんの娘と、娘のボーイフレンドだろうと推測していました。娘さんは一緒に来ている若い男と楽しそうに話をして、相手の男性が何か冗談を言う嬉しそうに体を寄せて笑っています。お父さんは野球帽をかぶっていました。娘とそのボーイフレンドと思われる男性もすごくカジュアルな姿です。娘とその男性が楽しそうに話している。父親は時々その二人を見ながら、娘が嬉しそうにその男性に寄り添うと、かぶった帽子に手を当ててふっと目を落とすんです。見ていると、なんだかこう悲しそうな感じも伝わってきました。食事が進む中で、その男性と私は隣り合わせに座っていたの

で、話をする機会がありました。話をしてみたら、私の長男が言っていた通りの組み合わせだったんです。まさに父親と、その娘と、その娘のボーイフレンドでした。私は子供が二人いますが、娘はいません。ですから成人してボーイフレンドがいる娘を持つ父親の気持ちは、私にわかりません。正直わからないんだけど、娘がいるというのは楽しい、幸せだ、ということと同時に、育っていくということでその悲しさも両方持ち合わせているんじゃないですかと問いかけたところ、その黒人のお父さん、名前はダニーといいましたが、ダニーさんはその通りだと言って、私にいろいろ思いを話してくれました。話している途中で娘はボーイフレンドと楽しげに会話をしている。ダニーさんは時々娘の方をチラッとみながら、でもふっとやはり目を落として、自分の子供の幸せを思うのであれば、早くいい相手を見つけて、相手と結婚が出来て、結婚した先で子供が授かって、幸せな家庭を築いてもらいたいと願う。でもそう思いながらも、自分から巣立っていこうとしている娘を見るのはやはり寂しい。小さい頃には自分が抱いていた娘が今はボーイフレンドに寄り添っている。その姿を見るのはやっぱり寂しい。

私がアジア人で、旅行者で、しかもなおかつ英語をネイティブに話す国の人間ではないといういろんな要素が重なって、ダニーさんも初対面の私に気を許したんでしょう。いろんなことを話してくれた。その話を聞きながら私が思ったことは、人は国が違おうが暮らし方が異なろうが文化がまったく違っていようがそんなことはたいしたことじゃない。親が子供をかわいいと思ひ、子供が親を信じて、親が授けてくれる愛情をたっぷり自分の体の中に取り込んで育っていくという、この人の営みというのは、人が勝手に作った国境などというものをやすやすと超えて、同じ思いをお互い同士が共有できるんだということを強く思いました。

豊かさが何であるか、大きなテーマです。個人によってその評価の仕方というのはきっと違います。生まれ育った環境でも違いますし、育ってきた時代の背景が異なれば「何が豊かであるか」ということを、一括りで「こうだ」という一語で説明することは無理です。そんなことは意味がありません。しかしながらどれだけ時代が変わってこようが、海を隔てたアメリカだろうが、アジアの中の違う言語を話す国であろうが、人が人として生きていくときに授かっている、その自分の中に生まれながらに備わっている心というのは、きっとそれほど違いは無いんだなということを、私はこのごろになって、50歳をいくつも過ぎた今になって、強く思います。

私を育ててくれた親もきっと同じことを思っているでしょう。物が溢れていけばいくほど、不便を感じるという非常に逆説的な言い方になるんですが、そういう思いを感じるということはいくつもあります。ものが無かったときの方が幸せだった、そう思えることがいくつもあります。世の中で成功して名前を世の中に知られてもう誰でももうらやむような大成功をした人、きっといます。そういう人たち、若い時分にしていた苦勞が下敷にあって今がある人にインタビューをして「あなたが今望むことは何ですか」という問いかけをし

た時に、10人に問いかければ10人全員が等しく言う答えというのが「あの苦労していた若い時代に、あれが欲しい、これが欲しいと夢を自分の中で膨らましていた時代が一番楽しかった。その時代に戻りたい。」誰もが口をそろえて言います。本当にそうなのか、これはわかりません。今が満たされているがゆえに、今が暮らしていくお金に困らない、食べるものに不自由をしない、そういう暮らしを営んでいるがゆえに言えるかもしれない。もっといえば本当にそんな貧しい頃に突き戻されたときに果たしてそれを幸せと感じるかどうか、それはわかりません。わかりませんが、でも言える事は物が多くあれば、お金がいっぱいあれば、そのことが幸せを必ず運んでくれるものであるかどうかということには何の保証もないということです。

あのアメリカで会ったダニーさん。そのときのディナーは娘が出してくれると言っていました。自分が一生懸命働いて育ててきた娘が、今日、その日は娘さんの誕生日でもあったんです。その誕生日を自分のお金で祝いながらなおかつ父親に食事をご馳走してくれるというその大事なディナーに、あのダニーさんが何を思っていたか。いろんな思いが頭の中を交錯していたに違いありません。幸せの背中には悲しみがいつもおんぶをしています。どんなことでもいいことだけのつまみ食いというのは絶対出来ません。

お話をまとめるにおいて、今申し上げた、ものごとのいいことだけをつまみ食いでできないということを最後にお話して私のこのスピーチを閉じます。今から4年前に私は直木賞という小説の大きな賞を頂きました。日本の中では大変に名のある賞です。この賞を頂いたことでいろんなことができるようになりました。自分で言わなくても、人が「この人は直木賞を頂いた作家ですよ」ということを私に代わって言ってくれることで、今まで入れなかった門が向こう側から開くようになりました。調べものをしたくて直木賞を頂く前にはどうやって調べればいいのかわからなくて困っていたことも、直木賞を頂いてからは、向こうから教えてくれるようになりました。これは直木賞という大きな賞の恩恵かもしれません。しかしこれはプラスの方の一面です。大きな影響に、その背中に責任が必ずついています。私は、直木賞を頂くのか頂かないのか、その選択は自分でできたんです。私は欲しいから「頂きます」といったんです。頂けばそれに付随する名誉はついてきます。しかし責任もついてきます。それは何か、といえば小説を書き続けていくということです。私が直木賞に届いた「あかね空」という小説を超える小説を、今日も明日も書きつづけていくんだという責任を自分の背中に背負うことを覚悟として、その賞を頂きました。直木賞を頂いたときにはそのことには気づきませんでした。でも時間がたつにつれて、書きつづけていくうちにいろんなことがわかってきました。物事には恩恵を受ける背中には責任が必ず伴っています。携帯電話が、便利であるがゆえに思わぬところで鳴ったりしたら周りから大変に嫌がられます。たとえばこういうふうな講演の場で、映画館で、コンサートで、携帯電話が出来る前にはそんなことを誰も言わなかったような「これから演奏会が始まるので、必ず電話をお切りください」というようなことを言わなければいけなくなった。それをしないで便利さだけを欲しがっていると、思わぬところで携帯電話が鳴って大きな響

蹙を買うということになります。物事は何事でもそうです。前だけがあるわけではありません。その後ろ側に大きな責任が常に伴っています。便利さを味わうだけでは物事は終わりません。便利の背中には負わなければいけない責任が必ずついてきます。これは自分の歩いていく道が一步高くなればなるほど、ステージが一段高いところで上がればそれだけ大きな責任が自分の背中についてくることになります。これから世の中の第一線に出て大きなフィールドで活躍をなさるあなた方がいつかの時点でどこかで自分の背中に背負っていかなければいけない責任というものに気づく日がきっとくと信じています。あなた方を今日ここまで育ててきたあなた方の両親は、そんなことを言葉は出さないまま、子供に愛情を注ぎ、子供を信じて今もまだ元気に暮らしていらっしゃるかもしれない。豊かであるということはものすごく大事なことです。貧しいよりは豊かであることを選ぶのはきっと当たっていると思う。あえて貧しいことを、不便なことを自分から選ぶ必要はありません。しかしながら、選んだ豊かさが自分が手にした便利さがまた授かった名誉が大きければ大きいほど、その後ろには大きなその名誉と同じだけの大きさの責任が常についているということを忘れなければ、何が豊かさであるのか、豊かさとは何なのか、そのことを勘違いしなくてすむと思います。

私はそのことを思いながら、今日もまたこのあと、原稿を一生懸命に書きます。それをやるのが、私が直木賞を頂いたことの責任であり、私が自分で思う豊かなことというのは何であるか、その答えを自分で小説を書きながら自分なりに見つけていると思って毎日を生きています。これからの世の中で活躍をなさるときに、どうか大きな成果を手に入れると同時にその成果の後ろ側には、成果と同じ大きさの責任というものが一緒にいるということ覚えていていただければと思います。(文責:日航財団)